

〈愛するが故の厳格さ〉

——津島家の兄と弟(一)

鶴 谷 憲 三

はじめに

長兄文治と太宰治（戸籍名修治）との関わりについては、これまで多くの人々によって言及されてきた。井伏鱒二は、太宰治の立場を推測して、彼は自らが状況を十二分に理解していたという。

太宰は、長兄文治氏の弟、つまり自分に対する思いやりや、愛するが故の厳格さ、かつ又、自分のやってきたことと兄の社会的立場等を、十分に判りきっていたはずだ。

井伏のこうした見解を肯い、さらに文治の苦渋を補強するが如く、中畑慶吉は言葉を継いで、次のようにも言う。

文治さんは、すべてのことをのみこんでおりました。太宰のことだって、ああもしてやりたい、こうもしてやりたいと思っていたのでしよう。しかし、田舎というもの、特に山源という家はそれを表だってやれる立場の家ではなかった。…愛情をもっていないが、その愛情を表現できないんです。

これに対し、ある一時期の両者を（囚人と看守の関係）と見、囚人は（看守の眼が届かない外では、欲求不満が爆発して、はめをはずしたのではないか）とする外崎美智雄（金木出身で、青森中学時

代の修治の友人）の証言もある。

三者の見方が間違っているわけではない。ただ、以下のようなことが言えるのではなからうか。井伏、中畑の見方は、〈時の遠近法〉とも言うべきものがあれば、そのことが作用し、すべてが均質化したトータルなものとなっており、逆に外崎のとらえ方は局地的な点に限っていると。そしていずれにしろ、表現者太宰治という視点は欠落していると言ってもいいであろう。

自らの性格の形成や（文学を志さしめ）るにあたって、（育つた家庭とか肉親とか或ひは故郷といふ概念）が抜きがたく根差しているとは、「わが半生を語る」での述懐であるが、はやくに父を亡くした太宰にとつて、長兄文治は特別な意味をもっていたはずである。兄弟というよりも（父子のやうなもの）（「一燈」）として考えるべきかも知れない。この両者がある時期に袂を分かち、表面的には太宰の死にいたるまで和解することがなかったことはよく知られている。

（地道な資料集めと、聞き書き）とを基に朝日新聞青森支局がまとめた『津島家の人びと』（朝日ソノラマ、昭56・5）によれば、

文治は財を失った後でも（「これで、わさ井戸堀になった。だども、政治の道を継いだのだから、親さ申し訳立つべ。」）としばしば語ったという。アイデンティティの確立には（何らかの形で自分が優越性や役割関係を持つている）という意識が不可欠とされる。いわば己の立場を自覚し、そのことを疑わない方が、不安という要素は希薄である。家への意識に関すれば、生家との間に生涯距離がなかった文治に対し、太宰のそれは微妙に揺れている。いやむしろ、その像が一つに収斂することがなかったために、距離をいかにとるかにか苦しんだと言えるかも知れない。作家太宰の武器は言うまでもなく表現である。私見によればその〈兄〉像、厳密に言えば、兄と自分との位置関係には転位がある。

この小稿では、〈愛情をも〉ちつつも〈表現〉をこばむ〈田舎の家〉・〈山源という家〉を文治を中心にまず確認する。屋上屋を架することになりかねぬが、その作業によつて文治の〈愛するが故の厳格さ〉の意味内容が判然とすると思うからである。そして紙数にゆとりがあるなら、それぞれの時期の典型的な作品によつて、兄への距離意識、位置関係を明らかにしたい。

反撥、甘えという屈折した想いが、ある時期から共感・同化へと転じ、究極的には表現者である自己と次元を異とする長兄と拮抗するものに定位せしめたと思うからである。

二人の兄弟の生家津島家はいわゆる名門・旧家といった門閥ではなく、明治になって急成長した家であることは今や周知のことと

なっている。明治初年の紳士録で再確認し、〈私の家が多少でも青森県下に、名を知られはじめたのは、曾祖父〉（の時代）（『苦惱の年鑑』）と記す惣助に至つて大地主の道を歩み始め、父源右衛門の代に津島家は全盛となる。今日最も入手しやすい『金木郷土史』（金木町役場、昭15・8）に、寛保から安政までの豪家をあげた「長者調」なる一項目がおかれているが、津島家の先祖らしき名はみあたらない。

この書で、ゆかりの名がみえるのは、明治三年閏十月十日、津輕承昭が旧藩士へ田地分与のため、旧藩地内の十町歩以上の田地所有者に御買上の旨を告諭した時が初めてである。津輕の地主二百九十人、買上田地二千八百余町歩、畑地五十町歩を一等から五等下まで六ランクにわけたもので、五等下に〈田地三町歩余 惣助△同上文左衛門〉と示されている。この時点では五等上までの百十五名には入っておらず、津輕で特に名の知られた家とは言えないことが理解できる。ちなみに父源右衛門の生家である松木家は二、等十九人に〈木造村 松木七右衛門 田地八十三町歩余御買上〉と名を連ね、はるかに豪農であった。

この津島家は、明治三十年には二百五十町歩の田畑を所有する県内十二位の税額を納めるようになり、源右衛門が惣助より代襲相続した四年後の明治三十七年には千四百三十三圓十三銭を納税する県内第四位の素封家にまで至つた。源右衛門は衆議院議員、貴族院議員となり、生家松木家をしのぐ（金木町津島王国を築き）（『青森県人名大事典』東奥日報社、昭44・4）あげたのである。

四十余年の短期間の急膨張の背景に何があつたか、その生成過程

の実質は、今は問わない。津島文治（明治三十一年一月二十日生、昭和四十八年五月六日没）、その弟太宰治（戸籍修治、明治四十二年六月十九日生、昭和二十三年六月十三日没、以下作家として旅立つまでは修治で統一する）の意識が、津島家の発展期・全盛期に培われたということは認めねばならぬだろう。津島美知子は「回想の太宰治」（人文書院、昭53・5）で、原稿生活者太宰の本質は次のことに尽きると語っている。

太宰は富裕な地主の家で育つて、自分のかせぎで得た金で生活してゆくべきだとは、考えていなかったと思う。

文治の感覚も又同じであつたらう。公職は生家の権威を象徴するものなのであつて、生活の資とは直接結びつかなくなつたはずである。父源右衛門から（王国）を継承した文治には祖母いしを頂点とする肉親、親戚、縁者の意向は無視できず、何よりも（田畑二百十町歩九反、畑一町歩三反）という領地、（二百九十戸）の小作人とその家族の生活がゆるがせにできぬものとして肩のしがかつており、これらの延長上に公職は位置するのである。家父長の意志が絶対という専制的なものでなく、家督を継いだ若き日の文治は、集合体が一つの生命を持ち、自らはその均衡の力学を保ちつつ発展させるといふ王様であることを自覚していた。例えば、後の修治との分家除籍に関する取り決めにあつても、形式上では自分と弟という個の問題にはしていない。そこには（甲（鶴谷注）文治のこと）、津島忠次郎、津島季四郎、津島英治の同意ヲ経テ）あるいは（意見を参酌シテ）決定したという形式を踏まえている。

自らの位置する状況を認識し、その枠内の時空で生きること

を文
（愛するが故の厳格さ）——津島家の兄と弟（一）

治は十二分に知っていた。（一地方でかなり名の知れた家）（肉親が楽しめなかつた弟の小説）と文治が言う時、誇りと同時に、こうした内実をかかえる長の役割の自覚も意味している言葉に他ならない。（生真面目）であり、（癩癩の強）（帰去来）い兄と表されるのも、性格的なものもあるが、文治の家に対する責任感がさらに増幅したものと思われる。

青森中学までの太宰は主席を通し続け、父源右衛門の彼へ寄せる期待は並々ならぬものがあつたといわれている。大正十二年三月四日父が不帰の客となり、大学を卒業したばかりの文治が二十五歳で家督を継承した時点でも基本構図には変化がなかつた。中学時の両者の関係は「一燈」によれば、次のようであつたという。

そのころは、私の学校の成績が悪くなかつたので、この兄の**一ばんのお氣**に入りであつた。父に早く死なれたので、兄と私の関係は、父子のようなものであつた。（傍点鶴谷）

源右衛門逝去後、若い家長を兄弟・縁戚・縁者が結束し、父の時代以上に津島家を発展させ、その基礎を磐石のものとするのが悲願であつた。最も囑望されたのが家はじまつて以来の秀才とされ、健康面でも問題がなかつた修治であつた。家のこうした願ひがある時期まで修治は理解していた節がある。中学時代の日記がそのことを明確に語つていよう。

兄の言「小説を読むと人間の本当のことがわかる。しかれども今は人間の基礎を作る為に勉強してるんだから小説不可読而絶対えらくなれ」兄之物のわかりたる言説涙の出る程嬉しかりき。兄よ安心あれ、余以後絶対止む小説。代数、幾何、英語

やる。

(大正十五年一月七日)

生家の興望をにないつつ、修治は青森中学を四年で修了、昭和二年四月旧制弘前高等学校文化甲類へ入学する。のちの家との葛藤・分家除籍(実質は義絶)の萌芽はこの時代に胚胎した。(弘高で不良性が芽生え、左翼運動に走ったり、「桃色」に狂ったりした)と文治に言わしめる時期である。

この時期修治は『細胞文芸』『座標』『校友会雑誌』『弘高新聞』等に習作を発表しているが、昭和の初頭という時代の風潮は作品群にも消しがたい痕跡をとどめている。ここでは、大地主の裏面を描いた「無間奈落」(『細胞文芸』昭3・5)を例にとってみよう。「父の妾宅」と題する序編のみが今日辻島衆一のペンネームで残されているが、この小説は自らの春のめざめと、大地主の家に流れる淫蕩の血を、大村周太郎・乾治の父子、その間にさだという女性を介在させて描いたものである。テーマそのものに目新しいものはことさらなく、大地主の家にみられる淫蕩性を戯画的に書いたものにすぎぬが、素材としたのは明らかに父源右衛門であり、自分である。

小説を事実と読みがちな風土性、ことさら地方にあつてはこの傾向が強かつたはずである。極端に言えば、活字として表現されたものはすべて『事実』として読まれたことも十分考えられる。したがつてこの創作を生家への内部告発と受けとめる向きがあつたことは想像に難くない。修治の側でも、そう読まれることを覚悟していたことも記述からうかがわれる。一例を挙げれば次の一節などこの最たるものと言つていい。

明治四十五年五月、今や衆議院の改選で国民は等しく殺氣立つて居た。大村周太郎は故郷のK県の第三区から敢然と立候補を声明した。周太郎は、その結局は算盤づくの競争に全く急しかつた。

父源右衛門が立憲政友会から立候補し、衆議院議員に初当選したのも明治四十五年五月のことである。おそらく文治はこうした修治のまぎらわしい叙述に抵抗を覚え、(王国)の權威をそこなうものと受けとめたにちがいない。山内祥史氏によれば同年六月に続篇の「第一章」が掲載され、この章未完のまま(或る意外な障礙に出席ひ)(これから先は、書くのに躊躇しねばならなく成)つたという付記がつけられたという。(或る意外な障礙)とは思つてもいなかつた外存的な力によるものであることは明白であり、決して修治の本意でなかつたことが理解できよう。

「第一章」は散佚して今日見ることかなわぬが、そのねらいは告発・反抗ということよりも自らの内にもある宿命を自覚するということであつたのではないか。あるいは、家を舞台にする愛憎アンビバレンツな心情を剔抉するところにあつたと言ひ換えてもいい。父周太郎の葬儀の時、大村乾治の内面は次のように描かれている。

彼は肅々と進む長い行列に或るアナクロニズムを漠然とながら感じて居た。そうは言ふものの彼はこの涙すべき長き行列の中でニヤニヤ笑ひ出す程の積極的な子供でもなかつた。彼には田舎の素封家の持つあの保守主義はやはり争はれなかつた。そして此の事から彼の生涯のあらゆる不運が生れて来たと言つてよかつた。(傍点鶴合)

表層はどうあれ、基層にあるのは〈あの保守主義〉なのであって、大地主の家が自己を呪縛していることをものがたつていよう。ただし、ここから家の告発・反抗という側面を引き出すことは無理がある。家によって培われてきた己の姿や内面・感性を凝視する側面に傾斜しており、その自分を性を媒介にして描いて行つた物語ではなかつたのか。

大正二年に家督を継いだ文治は、三代目の金木町長（大14・10、昭2・9）をつとめ、昭和二年政友会から立候補、三十歳の若さで県会議員となる。己に課せられた使命・周囲の輿望を視野に入れながら、その階段を一つずつ、着実に登りつづつあつた。順風にみえた津島家で、誤算となつたのが弟修治の急激な変貌である。

昭和五年四月、修治は東京帝国大学文学部仏蘭西文学科に入學した。これより昭和七年十二月下旬、左翼運動から完全に離脱するまでのほぼ三か年余りの日々は〈兄弟二人が激しく火花を散らし〉（『津島家の人びと』）た時期といわれる。主だつた出来事を列記すれば以下のようになる。昭和五年五月下旬の三兄圭治の死、同十一月下旬生家からの分家除籍を条件とする小山初代との結婚の承諾、同月二十八日の田辺あつみとの心中未遂事件、昭和六年一月文治との間に本格的証文「覚」を取り交わし両者署名捺印、昭和七年六月頃いまだ修治が左翼活動に関与していることに文治は激怒し、「覚」の禁止項目を楯に送金停止、七月中旬青森警察者の特高課に修治出頭以後非合法運動との絶縁を誓約する。

これらの一連の出来事の背景には、〈王国〉の名誉を守り、権威をそこねまいとする人々の意向が強く作用しており、その象徴が家

長文治である。兄から見れば弟は、文学を志す者の枠を（はるかに超えたところで行動し、事件をおこし続け）る（手に余る）（極道者）以外のなにもでもありえなかつた。文治が最も憂慮したのは弟の（左翼活動）が生家や自分に波及しかねないことだつたはずである。大地主であり、かつ保守政治家文治にとつて治安維持法に反する思想やその運動に関わるものを身内から出すことは致命傷に他ならなかつた。修治が高校、大学をすこした時期は全国の特高組織が完成し、強化をました段階と軌を一にしており、社会運動の取り締まりが急務とされていた。社会運動とは（資本主義経済組織の欠陥に職由して生起する諸問題を解決せんがための自救的運動）を意味し、その適用範囲はきわめて多岐にわたつていた。

労働運動、農民運動、無産政党運動、水平運動、学生社会運動、消費組合運動、文化運動、別の観点よりすれば、曰く社会主義運動、共産主義運動、ファツシズム運動、国家社会主義運動、農本主義運動等々非合法運動の諸運動を指称する

（一）地方でかなり名の知られた家）の秩序を守り、より発展させるためには、これを乱すものは弟といへども例外でなかつた。文治が昭和六年九月の県議選の立候補を見送つたのも、弟の行動が発覚した場合の非難を避けるという意味あいが含まれていたのでなからうか。と同時にこうした処置によつて、置かれた状況に対する覚醒を弟に強く促すという意味合いも込められていたにちがいない。〈愛するが故の厳格さ〉とは、文治のこうした心の驍をあらわしたものであるが、外崎美智雄の証言は、修治が単なる（囚人）ではなく、逆に（看守）のこうした弱点を知悉し、むしろそれを武器に

したことを語つて余す所がない。^註

文治さんは家名を守るため、修治さんと義絶したんです。しかし、金をやらないと何をしでかすかわからない。金はやるから『アカ』はやるな。こういつて証文を作つたのに、修治さんは、自分が『アカ』の動きをすると、津島家と文治さんが減びることを知っている。したがつて、修治さんは家の生殺与奪の権を持つていたから、ゆすりまがいに金をとろうとした。

2

この章では、事件の渦中にいた修治が事態を如何ように受け取っていたのかをまず検討し、ついで前期の表現にみられる生家・兄の姿をたどる。直接的な表現で分岐点をなすのは「東京八景」の（自分の苦悩に狂ひすぎて、他の人もまた精一ばいで生きてゐるのだといふ当然の事実）に氣附かなかつた。」という自覚の有無、認識の透徹にあり、それ以前はほぼ同質と思えるからである。現に生家・兄に直接言及する機会が圧倒的に中期が多く、ついで後期の順となつてゐる。

渦中であつた時の修治の心境をうかがわせるものはきわめて乏しいが、二つの書簡が一端を浮かびあがらせていよう。一つは小山初代が川崎想子名で治安維持法違反で下獄中の工藤栄蔵へあてた書簡中の一節である。

私の家（鶴谷注―津島家のこと）では凶作から起つた祟の恐れのため破産仕かけて居ります。五十九銀行を始めとし祟の銀行は大いあぶないやうです。家の銀行もつぶれるかも知れま

せん。私達はこんな事の起るのは前から本を読んで知つて居りましたからなにもおどろきません。私達はこれから家をあてにしないで働くつもりです。

（傍点鶴谷）

（昭和六年十二月二十三日、工藤栄蔵宛）

初代の健氣とでも云うべきものが、どこまで具体像をおびていたかは定かでない。文面からの印象では、激しい状況がこれから待ち受けていることは伝わってくるが、型にはまった《観念》先行の高ぶりの方が強くにじみ出ているのではないか。

いま一つは、同じ工藤永蔵宛の津島修治（銀吉名）の書簡であり、ここには不安と甘えと同居している。

私も色々と事件が重つて、つい失礼してゐたのです。私が少しへまをやつて、うちから送金をとめられてゐます。弱りました。兄貴は大立腹で、私は散々罵られました。くやしくて涙が出た。：（中略）：食うだけの事は出来ます。うちでもまさか、このまゝにして、私達を放たらしにしないでだらうと存じます。（傍点太宰）

（昭和七年六月七日、工藤永蔵宛）

観念上であれ初代の如く、自分達で今後の生活設計を立てたいとする意欲はどこにも見ることができず、やはり修治の意識には生家の財力抜きには日常生活が考えられなかつたことをよく証してゐる。

昭和八年より作家生活を出発する太宰治の前期の作品には、生家や兄を正面的に取り上げたものは数少ない。「思ひ出」にしろ、「虚構の春」にしろ、断片的な位置しか与えられていない。取り上げた場合でも、小説の全体を考慮に入れず、その件だけ読めば誇張化と

れた表現でありながら、自分一人が不当な仕打ちを受けている受難者として描かれている。青森県金木在住の山形宗太からの手紙として（断絶を食ひ、てんとして恥ぢず）とか（われひとり悪者として家郷追放の現在、いよいよわれのみをあしざまにのしり、それがために四方八方うまく治まり居る様子）などはこの典型的なもので、なにほどの生家に対するわだかまりがあったと見てもあながち不当ではあるまい。同時期には（フルサトノ長兄ト 日 一日 ナカヨクナリ、私、短期オコシテ怒ラヌカギリキツト 才金持二ナルノデス）（昭11・7・8、佐藤春夫宛）の書簡もあり、太宰の揺れ動く心情の一端を垣間見ることが出来る。思うに、太宰自身も距離を如何ように取るかはかりかねていたのであり、そのことが相矛盾するような表現の併存ということになったのであろう。これだけは確実と思えるのは、少くともある時期まで太宰は生家の財力を前提として自らの創作活動を考えていたということである。「閨々日記」（『文芸』昭11・6）には、次のような記述がみえる。

百五十万の遺産があったといふ。いまは、いくらあるか、か
いもく、知れず。八年前、除籍された。実兄の情に依り、けふ
まで生きて来た。これから、どうする？自分で生活を稼がうな
ど、ゆめにも思つたことなし。このままなら、死ぬるよりほか
に路がない。

「道化の華」を執筆している頃、中村地平に太宰が語つたという心情も同種の悩みを持つ友人に対する甘えでもあり、本音でもあつたはずである。

そのころ、僕の家をたずねてきた太宰が、さも重大な秘密で

（愛するが故の厳格さ）——津島家の兄と弟（一）

も告白するかのような顔つきで、「僕は貧乏がこわくてたまらないんだ。」と、声をひそめてつぶやいたことがある。貧乏にたいしては、太宰の気持ちに僕もまったくおなじであつたが、僕は自分のそんな気持ちにふれられるのがいやで、「貧乏がこわくて文学ができるもんか。」ひどく邪慳に、つきはなすように言つた。僕の言葉を聞くと、太宰は大人の言葉に傷つけられ
た子供のように、世にも情ない、寂しそうな顔をした。

進退谷まつた時、生家は自分を見殺しにするはずはないとする（甘え）は、その生涯にわたつて意識のどこかに巣喰つて居たであらう。「人間失格」をして彼の代表作とするなら、主人公大庭葉蔵の形象化からもこのことは読み取れる。葉蔵にとつて（父）とは不断に意識せざるを得ぬ（おそろし）い存在である。しかしながら、地方ではかぎりなく（懐し）いのであり、その死によつて（自分の苦悩の壺がからつぽになつた）と言わしめるほど葉蔵の中で占める位置は大きい。生家も又同じなのであつて、さりげない一節に隠された意味が浮かびあがつてくる。入水心中事件後、今後の生活設計を真剣に立てなさいとヒラメにさとされる件で、葉蔵はこう呟く。

ヒラメは、その時、ただかう言へばよかつたのでした。「官立でも私立でも、とにかく四月から、どこかの学校へはひりなさい。あなたの生活費は、学校へはひると、くじから、もつと充分に送つて来る事になつてゐるのです。」ずつと後のなつてわかつたのですが、事実は、そのやうになつてゐたのでした。さうして、自分もその言ひつけに従つたでせう。（傍点鶴谷）

お金は、くから来る事になつてゐるんだから、となぜ一こと、言はなかつたのでせう。その一言に依つて、自分の気持ちも、きまつた筈なのに……

《後年に到つて知》つたとするこの告白から二重の意識を読み取ることが可能である。一つは葉蔵を見離しているわけではない（くに）の期待であり、一つは脱出を志向しつつ、その実は（くに）へ頼つてゐる葉蔵の愛憎アンビバレンツな意識である。葉蔵の反撥・逃避という奥底には、如何なる状況に陥ろうとも（くに）は自分を見捨てることはないとする甘え、帰属意識が色濃く流れていることが理解できよう。生家・兄という観点に限定するならば、太宰治の作家生活は自らのこうした意識との争闘と言つてもいい。

おわりに

当初意図した《家・兄像の転位》については紙幅がつき、とうていかなわぬことになつた。本来問題にすべきは中期の作品であつたが、そのことは次回に譲りたいと思う。ここでは大まかな見取図だけを示したい。まず、「東京八景」に一つの転機が具体的にあらわれている。また一方の系列が「帰去来」、「故郷」そして「津軽」へとなつてゐる。これらには長年喝仰してかなわなかつた、見果てぬ夢の高まりが顕著である。これに對しいま一つの系列がある。「一燈」「津軽」を経て、「庭」によつて定位された世界である。この系列の特色をなすのは、生活者兄と表現者の弟という面が強く出ていることだろう。作品中で《兄》の「沈黙」——秘められた愛憎の基盤——と評される^{注10}「津軽」の次の一節はこの点について重要な鍵を与え

ている。

金木の生家では、気疲れがする。また、私は後で、かうして書くからいけないのだ。肉親を書いて、さうしてその原稿を売らなければ生きて生けないといふ悪い宿業を背負つてゐる男は、神様から、そのふるさとを取りあげられる。所詮、私は、東京のあばらやで仮寝して、生家のなつかしい夢を見て慕ひ、あちこちうろつき、さうして死ぬのかも知れない。

作家太宰治は《悪い宿業》のまま、負け犬のように（あちこちうろつ）ただけとは思われぬのである。▲表現▼という武器で、立派に兄に對峙し・拮抗しうるようになったことを次の機会に論じる予定である。

※この小稿は、平成九年十一月二十九日、日本近代文学会青森支部・青森県郷土作家研究会（一九九七年度）合同研究会集会で発表（正確に言えば、自己の疑問を会場の皆さまに問い質ねたもの）したものをもとに、大幅に加筆・修正したものであることをお断りする。

- 注1 中畑慶吉「女と水で死ぬ運命を背負って」(『噂』昭48・6)
 なお井伏の言葉は氏に語ったものとして、この文章の中で紹介されている。
- 注2 朝日新聞青森支局『津島家の人びと』(朝日ソノラマ、昭56・6) 中の証言
- 注3 竹田青字嗣『自分』を生きるための思想入門』(芸文社、一九九二・五)
- 注4 津島文治「肉親が楽しめなかつた弟の小説」(『噂』昭48・6)
- 注5 山内祥史「年譜」(『太宰治全集別巻』筑摩書房、一九九二、四)
- 注6 注4に同じ。
- 注7 内務省警察局保安課「特別高等警察執務心得」(特別高等警察例規集原稿、昭和十年)、初出未見、引用は『事典昭和戦前期の日本制度と実態』(吉川弘文館、平二・二二)に拠った。
- 注8 注2に同じ。
- 注9 中村地平「喝采」前後』(筑摩書房版『太宰治全集』月報2、昭30・11)
- 注10 安藤宏「津軽」の構造』(『太宰治3』洋々社、昭62・7)